

第三章 光る源氏の物語 源氏の悲嘆と弔問客たち

[第一段 源氏の悲嘆と弔問客]

*大将の君も、御忌に籠もりたまひて(大将君も近親者の死穢謹慎で不出仕なさって)、あからさまにもまかだたまはず(短時間ですら外出なさらず)、明け暮れ近くさぶらひて(朝夕と殿の御側に出向いて)、心苦しくいみじき御けしきを(お劳しいその御姿を)、ことわりに悲しく見たてまつりたまひて(無理もない事と悲しく押し申し上げなさって)、よろづに慰めきこえたまふ(いろいろと慰め言を申し上げなさいます)。 *「大将の君も御忌に籠もりたまひて」については、注に「おんいみ」がく三十日間の忌み籠もり。>とある。そして、与謝野訳文にはく夕霧も、紫夫人の忌中を二条院にこもることにして>とある。大将君にとっても、二条院は懐かしい実家の一つではあるのかも知れないが、三十日も籠もって少しも外出しない、となると少し違和感を覚える。一日二日、または数日以内なら然して問題でもないだろうが、三十日にもなると間に合わせでは生活に不便が出てくるし、大将の重責にあっては其相応の業務報告が毎日それも一度ならずと部下からもたらされるだろう。六条院なら母代わりの花散里が卒無く手配をしてくれそうだが、二条院の女房郎党体制では隠居の源氏殿なら暮らしも立つだろうが、大将君には無理に見える。明示は無いが、この文は舞台が二条院から六条院に移った事を示しているのではないか。逆に、此処が二条院殿明示があれば正すが、それまでは私は此処を六条院と読んで行きたい。それはそうと、「三十日間の忌み籠もり」とは近親者の死穢(しえ)謹慎なのだろうか。死が穢れだというのは、私にはどうにも分かり難い。死体の腐敗や乾燥による形態変化がおぞましい、というのは生を基調にものを考える日常感性からして当然意の説得力はあるし、火葬による炭酸化処理の利便性に異論は無いが、見方によっては動物の生こそが最も激しい有機反応を継続しているとさえ言えるだろうし、その反応も経過という見方もあれば、それ自体を生成物とする見方もある。などどのように、現代人の多くは、幸か不幸か、日常感性の絶対視からは開放されているように思う。

風*野分だちて吹く夕暮に(風が嵐めいて激しく吹く秋の夕暮れに)、昔のこと思し出でて(大将君は昔の紫の上を垣間見た日の事を思い出ささって)、「ほのかに見たてまつりしものを(灰かに押し申し上げた事があったな)」と、恋しくおぼえたまふに(と懐かしく思えなさるが)、また(また一方では)「限りのほどの夢の心地せし(死顔の可愛らしかった事)」など(などと生身の女を想う感触も)、人知れず思ひ続けたまふに(人知れず思い続けなさっては)、堪へがたく悲しければ(堪え難く悲しくなって)、人目にはさしも見えじ、とつつみて(人目にはそう見えなないように隠しながら)、 *「野分だちて」は注にく主語は夕霧。「野分」巻(第一章二段)の紫の上垣間見を思い出す。『完訳』は「夕暮は人恋しい時。夕霧の追慕と悲愁の心象景」。「桐壺」巻の野分の段にも通底する。>とある。「桐壺巻の野分の段」とは二章二段の「野分立ちて、にはかに肌寒き夕暮のほど、常よりも思し出づること多くて、靱負命婦といふを遣はず」と桐壺帝が北の方に弔問の使者を遣わした時の事だろう。嵐の不穏さと劇的な変化への期待感はいくつの人に共有される、とは今でも不変の舞台設定だ。それと、この文で気になるのは、「夕暮れに昔のこと思し出でて」という語り口に、やはり此処の舞台が二条院ではなく六条院に戻っていることを示している、ように感じられることだ。明示は無いが、多分そうなのだろう。

「*阿弥陀仏、阿弥陀仏」 *「阿弥陀仏」は「あみだぶつ」と読みがある。「なんまいだ(南無阿弥陀仏)」は平安後期以降、鎌倉期になって盛んになった浄土宗の念仏らしく、此処で言う「あみだぶつ」を唱える心情とは違うのかも知れないが、上の極楽浄土を願う気持は込められていたのだろう。「南無(なむ、なも)」は唱者の帰依を示す梵語言葉とのこと。ウェブ頼みの雑学だが、「阿弥陀仏」は西方浄土(極楽)に導く尊仏(如来)とのことで、現世で功德

を積む自力が無い者でも、念仏を唱えれば浄土へ導かれるという他力本願の元に在る教条らしい。浄土宗以前の古典解釈では空海の真言密教めいた響きだろうか。だとすれば、平安中期の物語当時の世相では流行物の趣もあったのかも知れない。因みに、「南無妙法蓮華経」は法華経に帰依するというお題目とのことだが、法華経は体系化された仏典のことらしく、それ自体は仏教全体やキリスト教で言う聖書のような規範経典あたりのことらしい。が、日本に於ける法華経、特に最澄の天台宗に於いては、東方浄土に導くとされる薬師如来を尊び、以て東方の国王である日本国の天皇の威厳を補佐し、最新の大陸文化であった学術や技術の流布に関して、日本国にあっては天皇家から現世利益が実現されるかの論理整合性が図られ、以て自らは教義権限者として王室宗派の地位を得る、という神仏共存が企画され、その体制は明治維新时期まで維持された、というものらしい。戦国時代の国体権威は京都御所よりは比叡山延暦寺が、その実効を示していたかの印象さえある。

と引きたまふ数珠の数に紛らはしてぞ(と念仏を唱える数を繰る数珠の数に紛らわして)、涙の玉をばもて消ちたまひける(涙の玉を隠しなさいました)。

「いにしへの秋の夕べの恋しきに、今はと見えし明けぐれの夢」(和歌 40-08)

「やっと会えたと、見れば死顔」(意識 40-08)

*「今は」が<やっと今こそ>と<臨終>の掛詞になっているのだろう。「明けぐれ」も「明け暮れ(朝晩、毎日)」と「明け暗れ(夜明け前の暗さ=紫の上の死顔を見た時間)」の掛詞。言い回しに遊びが有るから、暗くならず済んでいる歌なんだろうか。いや、実感が薄く憧れが強いから、大将の悲しみは気落ちではなく、まだ未来の出会いに夢が持てる<惜しみ>の気分なんだろう。だから軽い。

ぞ(などとお詠みなさる大将君は)、名残さへ憂かりける(心残りが続いていました)。

やむごとなき僧どもさぶらはせたまひて(殿は高僧たちを仕えさせ為さつて)、*定まりたる念仏をばさるものにて(通常の故人の成仏を願う念仏は言うまでも無く)、*法華経など誦ぜさせたまふ(荘厳な正統仏典なども読経させなさいます)。かたがたいとあはれなり(どちらの御経もそれぞれ有難く、大将も殿もそれぞれ深く感じ入る所なのでした)。*「定まりたる念仏」は<忌籠りに唱えることになっている読経>なのだろうが、それが故人の冥福を願うものなのか、縁者の潔斎のためのものなのか、其等の組み合わせなのか、はたまた別の有難い経典なのか、は私には分からない。ただ、この「念仏をばさるものにて」として、別に「法華経など」を挙げているので、当て図法でもこの両者の違いを考えないと、下の「かたがたいとあはれなり」までの全てが意味を成さない文になってしまうという始末の悪さだ。作者の粹狂も過ぎるが、少しは付き合う。で、「法華経」の方を<別の有難い経典>だということにして、この「定まりたる念仏」は潔斎を果たす為にも何よりも故人の成仏が必要だと考えて<上の冥福を願う経文>だと見做す。*「ほけきやう」は此处では叡山天台宗ではなく、仏典一般の意味の語用と見る。で、この念仏詰め合わせを殿の出家願望に添った善行などとするのは狭量に感じるので、教義自体には特に焦点を絞らずに声明の有難い仏典の響きで上の供養に努めたもの、と読みたい。なお、注にはこの文を<主語は夕霧。「させ」使役の助動詞。>としてあるが、同意しない。いくら葬儀の執行を大将が任されたからと言って、それは式次第を司る人員や物品の手配管理という準備作業であって、この御忌での念誦は埋葬作業の慌しさとは別の、一定期間繰返される紫の上への供養法要であり、その内容は殿の意向を承っていなければ変だし、下の「かたがた」が洒落にならない。「かたがた」は「定まりたる念仏」と「法華経など」の対比、および<大将>と<殿>との対比、という洒落になるから、面白がって作者はサラッと、とはいえ私には是

だけの分量のノートを要する難文になっているが、こんな文を書いたのであり、本筋から見て無意味な、洒落にもならない文を、この作者がわざわざ此処に書く筈も無い。

臥しても起きても涙の干る世なく(殿は寝ても覚めても涙の乾く時も無く)、*霧りふたがりて明かし暮らしたまふ(涙に曇る目で庭の秋風情を愛でなさる事も無く日々を過ごしなさいます)。*「きりふたがりて」は<霧に前が塞がれて庭の景色も見えない>のだろう。「眺む・長む」ことすらない。

いにしへより御身のありさま思し続くるに(殿は御自分の一生を振り返って御覧になって)、

「鏡に見ゆる影をはじめて(鏡に写った自分の姿を見た当初から)、人には異なりける身ながら(人とは違った優れた容姿とは思いつつ)、いはけなきほどより(幼い時から、母や祖母に死に別れて)、悲しく常なき世を思ひ知るべく(悲しく無常な世を思い知らされて)、*仏などのすすめたまひける身を(その容姿に自惚れて我を張っても空しいだけだと、仏などが自重した人生をお勧め下さった身の上だと言うのに)、*心強く過ぐして(気の赴くままに女に手を出して)、つひに*来し方行く先も例あらじとおぼゆる悲しさを見つるかな(結局は過去にも未来にも例を見ないと思えるほどの悲しい目に遭ったものだ)。 *「仏などのすすめたまひける身」は<仏典が教え下さった自重すべき人生>くらいに読んで置く。肝心の形容句が無い、というのは私には理解できない書き方だ。 *「心強く過ぐして」は<強情を通して>だろうか。これは対象体の明示がない。が、下に是を条件項とした結論として「悲しさを見つるかな」とあるので、対象体目的語は<女>や<女遊び>であると知れる。 *「来し方行く先も例あらじとおぼゆる悲しさ」は紫の上について言うなら、女三の宮との結婚で苦しめたこと、が先ずは挙げられそうだが、「いにしへより」というなら、やはり六条御息所に王家の深みを認めながら、その重さを避けた、ということが、紫の上の病床にまでその死霊が立ったことで、源氏殿には引け目だったように見える。藤壺との禁忌や兄帝尚侍との三角関係や衛門督藤君の裏切りなども、それぞれが各自それだけで一生を左右するほどの大事件だが、源氏殿はすり抜けた。家は栄え、孫は東宮だ。が、満たされていない。贅沢な悩み。足るを知らない人の愚かさ。などと言ってみても、空虚さは埋まらない。かといって、これは悲劇ではない。かといって、爆笑艶談でもないが、愉快的な登場人物も多く、多くの宮廷描写も交えながら、宮美の中に源氏殿の物語は終焉を迎えつつあるようだ。まだ話は続くようだが、紫の上の死を以て、源氏殿が自分の人生を総括したこの時点で一巻の終わりではあるのだろう。

今は、この世にうしろめたきこと残らずなりぬ(今はもうこの世に思い残す事はない)。 *この文について、注には<『完訳』は「源氏の出家を引きとめてきた最大の絆は紫の上の存在であった」と注す。>とある。少し付け足せば、結果として、そうなった、ということだろう。北山での出会いは運命的だった、かも知れないが、二条院を譲り受けたのも、六条院を構えたのも、紫の上の功績では無い。ただ、その舞台上で輝いていたのは紫の上だったし、今や晩年の殿にそれ以上の存在は現出し得ない、ということだ。

ひたみちに行ひにおもむきなむに(ひたすら仏道修行に打ち込むのに)、障り所あるまじきを(差し障りもないところだが)、いとかく収めむ方なき*心惑ひにては(これほどまでに嘆きが収まらない世俗への執着ぶりでは)、願はむ道にも入りがたくや(出家も覚束無い) *「心惑ひ」は注に<『集成』は「紫の上への愛執の思いの絶ちがたいことを嘆く」と注す。>とある。ざっと、執着心の強さに出家を阻まれる、という文意だろう。二章五段にあった「心弱き後のそしりを思せばこのほどを過ぐさむとしたまふに」という思いと重なるのか、同じなのか、異なるのか、とても分かり難い。ただ、執着心は自発意で、「後のそしり」は他発意、という違いは有りそうだ。

と、ややましきを(とやましさに気が引けて)、

「この思ひすこしなのために(この執着心を少し均し鎮めて)、忘れさせたまへ(上への未練を忘れさせて下さい)」

と、*阿弥陀仏を念じたてまつりたまふ(と阿弥陀如来に願い奉りなさいます)。 *「阿弥陀仏」は上の極楽成仏を願う供養の念仏なのだろうが、敢えて「阿弥陀仏を念じ」という言い方に当時の世相を写す作者の時代を生きている心意気以外に、別の意図があるのかどうかは不明だ。私には分からない。

[第二段 帝、致仕大臣の弔問]

所々の御とぶらひ(各方面からのご弔問は)、内裏をはじめたてまつりて(帝を初めとし申し上げて)、例の作法ばかりにはあらず(通常の儀礼に留まらず)、いとしげく聞こえたまふ(大変頻繁に遣わし申しなされました)。

思しめしたる心のほどには(出家をお考えになっている殿の御心持ちとしては)、さらに何ごとも目にも耳にもとまらず(今さらは俗世のことは何があっても気にならず)、心にかかりたまふこと、*あるまじけれど(未練がましいことも無い筈だが、今でも殿は上をとてもお忘れになれないので)、 *「あるまじけれど」は<無い筈だが>という言い方の筈だが、下文の文意からすると此処の接続助詞「ど」は逆接ではなく、順接の「ば」と同義の語用らしく見える。是は「ど」が順接する特異な例と言えるのかも知れないが、下に<なほえ忘れたまはで>が省かれているようにも読めそうだ。

「人にはほけほけしきさまに見えじ(人から気落ちして惚けたとは見られないようにしよう)。今さらにわが世の末に(今さらこの晩年になって)、かたくなしく*心弱き惑ひにて(見苦しくも伴侶を失った気弱さを紛らすために)、世の中をなむ背きにける(出家に逃げた)」と、流れとどまらむ名を思しつつむになむ(と流れが止まらない悪名が立つのを憚って)、身を心にまかせぬ嘆きをさへうち添へたまひける(思うように出家に踏み切れない情けなさまで加わって殿は嘆きなさいます)。 *「心弱き惑ひ」は分かり難い。一段に「収めむ方なき心惑ひ」という言い方があり、二章五段には「心弱き後のそしり」とあった。が、そも、伴侶を失って気落ちした「心弱き惑ひ(頼りない気弱さ)」が、若い盛りの喪失感ならいざ知らず、晩年に於いての出家に障る、というのが分からない。人は一人で生きているのでは無い。まして、人生を共に歩んできた連れ合いを失えば、実際に支えを失うし、当然に落胆もする。気弱になることこそが自然の成り行きで、それが人生の味わいの一つなのではないのか。まあ殊更に味わいを言い立てずとも、若いということは必ず一面で詰まらないのであって、要するに何時までも仕事が出来ない事を意味し、何時までも若いままでは駄目だし、また駄目なままでも何時までも若くは居られないというのは、物質がエネルギー変換反応し続けることで一定の形態が一定期間維持されるという生物の物的特性でもあって、年老いた事それ自体が困った問題である筈は無い。が、老いてもまだ責務を課せられている場合は、老いの弱気で道に迷うのは困るかも知れない。その場合には、迷いから救うというのは、むしろ真つ当な仏心の一つの形かとも思えるので、出家の妨げになる可くも無いと思うが、違うのだろうか。勿論、より広い問題意識を持って論理を極めようと修行する、という出家姿勢を否定する心算はさらさらない。が、言ってみれば、動機が何であれ、問題意識を追及する気が在れば人は自然に学ぶだろうし、特に問題意識が無くても何となく修行生活がしたいという人を拒む理由が教義に在るとも思えず、在ったとしても人は自由に修行できるだろう。仏教に限らず、およその宗教には、その教義に則った入信儀式がありそうだ

が、動機によってその儀式が変わるということもないんじゃないかな。あったとしても他人にどう見えるかは信仰の本質では無いだろうから、傍目での体裁などは都合の良い様に言い繕えば済む話に思えて、「心惑ひ」や「後のそしり」が何故問題になるのか、何とも分からない。それに源氏殿は疾うに朝廷の第一線からは退いていて、準太上天皇という地位自体が祭り事には違いないかも知れないが、それは式典儀式などの関しての役割であって、具体的に課せられた政務は無いかと思う。やはり源氏殿にとっては、その出家やその理由で都合が悪くなる人が出てくる恐れや可能性がある場合に、自分の問題ではなく、他人に迷惑が掛かる問題として懸念がある、ということであれば、その出家を中止する論理的整合性は無いように思えてならない。で、その他人への迷惑で最も深刻に見えるのが、やはり東宮の即位への悪影響だ。が、それならそう書けば良さそうなものを、作者は頑強にこういう分かり難い書き方を続けている。一体、「心弱き惑ひ」で出家するのは、何が問題なのか、何を言いたいのか、何を言っているのか、重要な主題だとしても私には分からない。

致仕の大臣(ちじのおとど、前太政大臣の藤原殿は)、あはれをも折過ぐしたまはぬ御心にて(人情の機微を心得ていらっしゃって)、かく世にたぐひなくものしたまふ人の(このような世に無類の佳人でいらっしゃった紫の上が)、はかなく亡せたまひぬることを(はかなくお亡くなりになった事を)、口惜しくあはれに思して(残念で悲しくお思いになって)、いとしばしば問ひきこえたまふ(とても頻繁に源氏殿に御見舞の使者を遣わし申しなさいます)。

「*昔、大将の御母亡せたまへりしも(昔、大将の母君が亡くなったのも)、このころのことぞかし(ちょうどこの頃の季節だった)」と思し出づるに(と思い出されるに)、いともの悲しく(藤原殿はとても物悲しくなると)、*「昔大将の御母亡せたまへりし」は注に<致仕大臣の心中。葵の上の死去は今から三十年前の秋、八月二十余日であった。>とある。葵の上は藤原殿の同腹妹だった。で、大将の北の方は藤原殿の愛娘だから、大将家の子供たちは藤原氏の血が濃い。

「その折、かの御身を*惜しみきこえたまひし人の(その時にその母御の早世を惜しみ申しなさった人たちも)、多くも亡せたまひにけるかな(その多くは亡くなってしまったな)。後れ先だつほどなき世なりけりや(後れ先立つと言っても僅かな違いだ)」*「惜しみきこえたまひし人」は注に<『集成』は「父左大臣や母大宮など」。『完訳』は「葵の上の死を悲嘆した人々の多くは故人。時の経過を思う」と注す。>とある。桐壺帝も惜しんでいた。桐壺帝から見ても、葵の上は妹の娘で姪だ。

など(などと言って)、しめやかなる夕暮にながめたまふ(雨模様の夕暮れの庭を眺めなさいます)。空のけしきもただならねば(天気も涙がちという秋の風情なので)、御子の(おおんこの、ご子息の)*蔵人少将してたてまつりたまふ(蔵人少将を使者に立てて遣し申しなさいました)。あはれなることなど(御文には慰めの言葉などを)、こまやかに聞こえたまひて(丁寧にお書き申しなさって)、端に(その端に、こう贈歌なさいました。)、*「蔵人少将(くらうどのせうしゃう)」は注に<致仕大臣の子。故柏木や左大弁の弟。>とある。三男坊だろうか。であれば、大将とほぼ同い年くらいか。

「いにしへの秋さへ今の心地して、濡れにし袖に露ぞおきそふ」(和歌 40-09)

「秋に昔が偲ばれて、袖はいつそう濡れそぼつ」(意識 40-09)

*注に<致仕大臣の贈歌。三十年前の妹葵の上の死別を思い合わせながらこのたびの紫の上の死去に対する弔問の歌。>とある。「いにしへの秋さへ」の「へ」の繰り返しが音韻としても、字の形としても、波形を感じさせる、という趣

きだろうか。「今の心地」という言い方に「露」に繋がるような独特の意味でもあるのだろうか。表意のままの歌意からは、如何にも藤原殿らしい率直さがあるような気もするが、複意や技巧は私には見当たらない。だとすると、「濡れにし袖に露ぞおきそふ」に工夫が足りないような、何かもう少し気の利いた語用がありそうな拙さみたいなものを感じるが、実直さを素直に受け止めるべきなのだろうか。

御返し(殿の御返歌はこうあります)、

「露けさは昔今ともおもほえず、おほかた秋の夜こそつらけれ」(和歌 40-10)

「夜冷える秋の露けさは、昔も今も変わらない」(意識 40-10)

*注に<源氏の返歌。「秋」「今」「露」の語句を用い、「いにしへ」は「昔」と言い換えて返す。>とある。「露けさ」は<涙がち>の意が含まれる風情ある語かと思うが、この語の使用を藤原殿に譲られたかの感がある贈答だ。いやしかし、源氏殿は敢えてそれに乗った、という二人の間の呼吸感みたいなものがあって、それが「昔今ともおもほえず」という言い方に味わいを添えているように聞こえる。少し野暮ったさを思わせた藤原殿の「濡れにし袖に露ぞおきそふ」という下句の言い回しは、其処までも計算した藤原殿の呼び掛けであったように見える。というか、そういう作者の意図かと思う。つまり、この贈答歌は二首が同時に出来た、か、答歌が先に出来て贈歌をそれに合わせた、みたいな印象だ。尤も、実際の歌会の記録ならいざ知らず、是は物語上での贈答歌なのだから、他の場面も同様だが、贈答歌としての組み合わせの妙が最初から企画されているのは自明ではある。

もののみ悲しき御心のままならば(藤原殿が水を向けなされた伴侶を失った悲しさだけの御心のままでお詠みになる御返歌では)、待ちとりたまひては(藤原殿は待ち受けなされて)、*心弱くもと(思った通りに気弱のようだ)、*目とどめたまひつべき大臣の御心ざまなれば(全てお見通しとばかりに見透かしなされたような口振りの御贈歌だったので)、*めやすきほどにと(源氏殿は無難な体裁にと、素知らぬ顔でこのような気取った詠みっぷりの返歌をなされたようで、結びの文面にも)、*「心弱し」は此処では出家に障るという文脈ではないので分かり易い。さんざん女を泣かせてきた源氏殿が、それを張り合ってきた藤原殿に対して、女に先立たれて気弱に悲しんでいる姿を見せるのは、勝負に負けた形に見えなくも無い。笑われるようで癪だ。そんな意地を張り合っても意味が無い、ようにも見えるが、それが「昔今ともおもほえず」という源氏殿と藤原殿の仲なのだろう。ほろ苦い遊び心みたいな。いや、だがしかし、もしかすると「心弱き惑ひ」を殿が拘る核心は、この意地の張り合いにこそあるのかも知れない。源氏殿と藤原殿との確執は、私などが思うような漠然としたものではなく、実際に権力闘争だったか。確かに、将同士の付き合いの作法としては、互いに紳士的で、貴族の風雅に富む生活様式を楽しんでいたのだろうが、藤原殿が中宮擁立に執念を燃やしていたことは可也の分量で書かれていたし、そのことの現実的な意味の重さは雲上世界ならではの切実さ、だったのかも知れない。それなら成る程、「後のそしり」を何故それほどに殿が恐れるのかなど、私などには分からない筈だ。*「目とどむ」は<注目する>。藤原殿がどういう意図で注目するのかと言えば、源氏殿がどれくらい参っているかを見極めようという興味だ。勿論、冗談半分だが、半分は本気だ。*「目安し」は<無難>。此処の文は「めやすきほどにと」と下文への形容にも成っていて掛詞の洒落語用とも読めそうだが、主たる内容は上示の返歌についての話であり、下示に余韻を残して此処で句点を打つ校訂も成立しそうだ。

「たびたびのなほざりならぬ御とぶらひの重なりぬること(たびたびの御丁寧な御見舞を頂きまして)」

と喜びきこえたまふ(と御礼申し上げなさいます)。

「*薄墨」とのたまひしよりは(薄墨色とお詠みになってお召しになっていらっしやった葵の上の御忌の時の喪服よりは)、今すこしまやかにてたてまつれり(今回は少し濃い色の喪服を殿はお召しでした)。*「薄墨とのたまひしより」は注に<源氏が「限りあれば薄墨衣浅けれど涙ぞ袖を淵となしける」(「葵」第二章七段)と詠んだことをさす。>とある。「限りあれば」を文字通り受け取れば、地位や年齢の所為で当時は薄い色の喪服だったようにも思える。葵の上の死去はざっと三十年前で、当時の源氏殿は22歳で近衛大将だった。今は51歳で準太上天皇だ。それとも、今回の方が悲しみが深いから濃い色の喪服だという意味だろうか。しかし、殿の内心での悲しみは葵の上の死よりも紫の上の死の方が深いとしても、それを外形に表すというのは考え難い気がする。が一方で、地位や年齢だけで喪服の色が決まるなら、敢えて此处で言わなくても分かり切った事であるような気もして、となると、やはり悲しみの表現だろうか。

世の中に幸ひありめでたき人も(現世で幸多く恵まれた人でも)、あいなうおほかたの世に嫉まれ(逆に多くの人に嫉妬されて)、よきにつけても(身分が高くて)、心の限りおごりて(慢心して人を見下して)、人のため苦しき人もあるを(見苦しい事もあるものだが)、*あやしきまで(紫の上は不思議なほどに)、*すずろなる人にも受けられ(周辺の人にも広く人気があって)、はかなくし出でたまふことも(ちょっとなさる仕種も)、何ごとにつけても(何をしても)、世にほめられ(世間で評判になり)、心にくく(配慮が行き届いて)、折ふしにつけつつ(季節柄の装束も)、らうらうじく(洗練されていて)、ありがたかりし人の御心ばへなりかし(不世出の御人柄なのでした)。*「あやしきまで」以降は、上文の一般論に比してという構文で<紫の上への讃辞を書く。このあたりの文章は、薄雲の巻の、藤壺崩御に当って、その仁慈を讃える文を連想させる>と注にある。指摘に従って、二十年前の話になる訳だが、薄雲巻三章四段を読み返してみても、藤壺宮の存在の大きさを思えば、更に桐壺巻での元服と葵の上との結婚、その時点で既に藤壺への恋慕が強かった事、そして過ちもあって、空蝉、夕顔、六条御息所らの登場で波乱は続き、紫君との出会い、禁忌の子冷泉帝の出産、兄宮と藤原六姫をめぐっての三角関係、と、この物語は怒涛の展開を見せたのであり、その登場人物の配役に当初から相当に凝った戯曲構成があることが改めて確認できた。源氏殿の頭の中では、紫の上は藤壺宮の靈魂を引き継ぐべき存在であり、藤壺と紫君の二体を持って一つの理想像を形成していた、かのような印象を受ける。その理想像が体現していたものの一面には王家再興があり、それは六条御息所が体現していた伝統継承だけでは、つまり王家の自力だけでは、もはや図れない、という情勢判断を伴いつつ追求めた形であり、自身が準太上天皇の地位に就いて、孫の東宮立太子を見ても、実態は藤原氏の領地拡大に抗せず、子息の大將君は紫の上を憧れるだけで、足場はますます藤原氏に組み込まれて行く、という頼りなさだ。こうした物語構想が作者にあったということは、作者が相当に古典、特に中国古典に通じていた事を窺わせるに十分だ。といっても、私は其等の古典は知らないが、膨大な大陸史になら、蓄積された悲喜劇が相当量あるような気はする。全くの私見、それも漠然とした思い付きだが、日本人が日本語で其等の外国知の翻訳を試みることは、単に一偏狭地域への文化流布という面だけではなく、大陸史観を島国という閉ざされた一種の実験研究棟で客観検証する、という普遍的な意味合いも有るかを期待したい。尤も、ガラパゴスが潰されずに生き延びる保証など何処にもないが。*「すずろなる人」は<関係のない人。関心を持たない人。>と古語辞典にある。ただ、「すずろ」は「漫ろ」で「そぞろ」と同源語ということらしく<漫然。明瞭な根拠が無い。何となく。>みたいな語感があるので、「すずろなる人」は下級の人を<愚か>などと言わずに、なるべく見下げないように気遣って表現したものの、のような感じも受ける。が、よく分からない。で、「受く」が<受け付ける、受け入れる、認める、信じる>あたりだとして、「すずろなる人にも受けられ」は<関係のない人にも受けが良い→周辺の人にも広く人気がある>み

たいに考えて置く。尤も、今のような電化媒体は無いから、評判は全てロコミなんだろうが、多分、素直な人柄と可愛らしい容姿などが喧伝されたのだろう。作者の意図する紫の上の人物設定はアイドルっぽい。

さしもあるまじきおほよその人さへ(然して深い縁も無さそうな多くの都人さえ)、そのころは(この紫の上の悲報に接して)、風の音虫の声につけつつ(風の音や虫の声という秋の風情の寂しさと相俟って)、涙落とさぬはなし(涙を落とさない者は居ません)。まして、ほのかにも見たてまつりし人の、思ひ慰むべき世なし(まして少しでも紫の上を見知り申し上げた人なら其の死を惜しんで皆哀悼に沈みます)。年ごろ睦ましく仕うまつり馴れつる人びと(長年親しく仕え申した女房たちは)、しばしも残れる命、恨めしきことを嘆きつつ(死に後れた事を恨めしく嘆いては)、尼になり(出家剃髪し)、この世のほかの山住みなどに思ひ立つもありけり(都を離れた山暮らしなどを決心した者も居たのです)。

[第三段 秋好中宮の弔問]

冷泉院の後の宮よりも(冷泉院の後である秋好中宮からも)、あはれなる御消息絶えず(心のこもった御見舞が絶えずあって)、尽きせぬことども聞こえたまひて(尽きぬお悔やみの文面を申し下されて)、

「枯れ果つる野辺を憂しとや、亡き人の秋に心をとどめざりけむ (和歌 40-11)

「枯野が嫌で亡き人は、春より秋を避けたのか (意識 40-11)

*注にく秋好中宮から源氏への見舞いの贈歌。『河海抄』は「霜枯れの野辺を憂しと思へばや垣ほの草と人のあるらむ」(古今六帖拾遺)と指摘。『集成』は「昔、春秋の争いに、紫の上は春を好んだことによって詠む」。『完訳』は「「秋に一けん」は、秋に亡くなったのは秋を好まなかったためか、の意。「枯れはつる」は秋の終りとともに、人生の終末をも連想」と注す。>とある。「霜枯れ」は「下離れ」に通じて<やがて愛想尽かしを食らう>みたいな気弱さを言っているのだろうか。「垣ほの草」は<垣根に生えた草>だろうが、「垣(かき)」は<仕切り、さえぎり、防護壁>であり、「くさ」は「種」であり<～のたぐい>を意味するので、「かきほのくさ」は<(振られるのを嫌って)予防線を張る→拒む>と言っているのだろう。この予防線を張る、という用心が、この歌に詠まれた紫の上の姿に重なる、のだろうか。

「今なむことわり知られはべりぬる(今になってその訳が分かりました)」

とありけるを(と御贈歌があったのを)、ものおぼえぬ御心にも(殿は半ば虚ろの御心ながら)、うち返し(繰り返してお読みになって)、置きがたく見たまふ(下にも置き難くお思いになります)。

「いふかひあり(事情に通じて)、をかしからむ方の慰めには(情緒の分かる話し相手には)、この宮ばかりこそおはしけれ(この宮しかいらっしやらない)」と、いささかのもの紛るるやうに思し続けるにも(と少しは気が紛れるように思い続けなされるにつけても)、涙のこぼるるを、袖の暇なく(涙がこぼれて袖の乾く暇がなく)、え書きやりたまはず(直ぐにはお返事をお書きになれません)。

「昇りにし雲居ながらもかへり見よ、われ飽きはてぬ常ならぬ世に」(和歌 40-12)

「雲の高みに見えますか、飽きなく無常に迷うアリ」(意識 40-12)

*注に<源氏の返歌。「果つ」「秋」の語句を用いる。「かへり見よ」の主語は茶毘にふされて空にのぼった紫の上。紫の上に呼び掛けている。「あき」に「秋」と「飽き」を掛ける。『完訳』は「贈答歌としては中宮への返歌になりきらない。しかし、「のぼりにし雲居」を中宮の位と解し、中宮に呼びかけたとする一説はとらない」と注す。>とある。が、「中宮に呼びかけたとする一説はとらない」という注は何を言っているのか分からない。段頭にも「冷泉院の後の宮よりも」という振りがあって、この歌の贈答はその振りに続く一連の話の中に組み込まれているのだし、もとより返書に認めた御返歌なのだから、むしろ秋好中宮への呼び掛けの方こそが表意で、その裏意に紫の上への呼びかけを込めた、と取るのが普通で穏当だ。まして、今少し前に「をかしからむ方の慰めには、この宮ばかりこそおはしけれ」と、また振りを重ねてあるのに、この掛詞の情緒をぶち壊すような注釈を、敢えて言う意図は全く分からない。不思議だ。しかも、この味わいは原文ならではのもので、歌筋や歌意の一部をなぞるだけの言い換え文では表現の仕様が無いものだ。だから敢えて言えば、意識を試みようとする私のような者に対して、皮肉っぽく注してある、という意味には成るのかも知れないが、仮にそうだとすると、それは注釈の姿勢として疑問だし、土台、注釈者が私のような者を念頭に置く筈も無い。

おし包みたまひても(御返書を丁寧に包装なさった後でも)、とばかり(しばらくは)、うち眺めておはす(殿は呆然と庭を眺めていらっしやいます)。「おし包む」は注に<手紙を上包みの紙に包む。きちんとした体裁の返書。>とある。

すくよかにも思されず(このように改めて上が僂ばれると、殿は気をしっかりとお持ちになれず)、われながら(御自分でも)、ことのほかにほれぼれしく思し知らるること多かる(その日は特にぼんやりした気分思えなさる事が多いので)、紛らはしに(思い詰めないように、気分を紛らわせようと)、*女方にぞおはします(女房たちの控えの間の方にお行きなさいます)。*「をんながたにぞ」は注に<『集成』は「女房たちのいる所。奥向き。男性の出入りする表向きの場所での緊張に耐えない」と注す。>とある。「緊張に耐えない」とあるが、本文に「紛らはしに」と書いてあるのだから、庭を眺めていても気が滅入るので気晴らしに、くらいのことに取る方が素直かと思う。

仏の御前に人しげからずもてなして(仏壇の御前に女房たちを少なめに呼び寄せて)、のどやかに行なひたまふ(殿は静かに上の供養をなさいます)。*千年をも諸共にと思ししかど(千年を共に生きようとお思いになったのに)、限りある別れぞいと口惜しきわざなりける(道半ばでの別れとは実に残念な事なのです)。*「千年(ちとせ)」は仏法の説明では日常性を超えた大きな概念を示す数字式表現なんだろうか。「三千世界」という宇宙観があるそうで、太陽に惑星が千個、銀河に太陽が千個、宇宙に銀河が千個、みたいな話らしい。現代の観測知見とは違うが、概念認識は近いかも。落語の「三年目」には、この「三千世界」の他に「十万億土」という仏法用語まで出てくるが、「十万億土」の方は<極楽までの遠さ>をいうらしく、成仏した女房が幽霊になって出てくるのを待っていた亭主が、出が遅れた女房の幽霊に、極楽までの距離が遠いから遅れたのかと聞いたら、女房は死んだ時に剃髪されたから髪が伸びる<三年目>まで格好が着かずに出て来れなかった言い訳した、と女心でくすぐる人情話とのことだが、この下げの工夫は源氏殿が紫の上の剃髪を考えて、大将君が思い止まらせたという辺りの話と何処か通じるものを感じて、江戸時代には仏教が民衆にまで広く浸透していたことに改めて気付かされると共に、そういう下地が有ってこの物語を読むのと、こうしていちいち調べないと意味が呑

み込めないのでは、文の味わい方が相当に違いそうだと思います。こうなるともう、客観的に考える点では、予断はむしろ少ない方が良かったりする、とせめても慰める他は無い。ただ、この「千年」が引いた仏典指摘などを簡素に注釈して貰うと有難かった気はする。それと、もし「三年目」の夫婦愛が今でも通じるなら、下げの工夫は「三千世界」や「十万億土」の概念自体を霊体移動の速度を逆手に取って、相対論で茶化す方が面白そうだ。

今は(殿は此処では)、*蓮の露も異事に紛るまじく(蓮華の誓いが第一に叶うようにと)、後の世をと(上と共に御自分の成仏を)、ひたみちに思し立つこと(ひたすら願って念仏を唱えなされるのに)、たゆみなし(余念がありません)。*「はちす」は極楽浄土の蓮華の座のことで成仏の象徴の語用らしく、「露」は此処では<はかなさ>や<涙>ではなく<情=紫の上と同座する>で、「後の世をと」は<極楽に成仏して蓮の台に同座する事を願う>という文意なのだろう。とても分かり難い言い回しの文で消化不良感があるが、その文意であれば、仏心としては現世未練が断ち切れない相当に見苦しい印象なので、それが下文の「人聞きを憚りたまふなむ、あぢきなかりける」という揶揄には符合する、かと思う。注には<『河海抄』は「蓮葉の濁りにしまぬ心もて何かは露を玉とあざむく」(古今集夏、一六五、僧正遍昭)を指摘。『集成』は「今は極楽往生の願いも、ほかのことで紛れるはずもなく、後世のこをと」と訳す。『完訳』は「往生して紫の上と一つ蓮台に座れるのに専念」と注す。>とある。「専念」というよりは「腐心」に見えるが、大筋は『完訳』に従いたい。『集成』の言う文意は私には焦点が見えない。古今集の参照歌は、上句が「蓮葉の濁りにしまぬ心もて」は<蓮葉は泥水の中で汚れに染まらず美しく咲く蓮の生き様からして=極楽を願う真心に掛けて嘘は吐かないので>という事で、下句が「何かは露を玉とあざむく」は<その露は決して真珠に劣らない美しさ=涙はガラス球ではない=あなたに会えずに涙する恋心に騙す心算はない>あたりだろうか。もしそうなら、この「はちすばのつゆ」と「蓮の露」は違う気がする。尤も、「蓮葉の露=蓮の露=永久の誓い」が文化人の常備認識だとすれば、初端から共通の語意であり、此処の文自体も実は平易なのであり、私に常識が無いだけの話だ。

されど(しかしこの読経は)、人聞きを憚りたまふ*なむ(公式法要ではなく、私的に人払いをしてなさろうというところが)、*あぢきなかりける(未練塗れの見苦しきなのでした)。*「なむ」は強調意の係助詞で「ける」の連体形で結ぶ文型。「けり」は傍観表現で、この文意では軽口口調の印象だ。*「あぢきなし」は<不都合だ>だが、何が「不都合」かと言えば<未練を引きずって来世の縁を願うという分別の無さ>なのだろう。よく分からない世界だが、仏教で言う魂は多様な物性という認識に近い印象で、現世での一つの物性はその一定の運動量が消費されれば終止し、魂は来世の局面に移行する。現世の縁は一局面での反応に過ぎないので、来世ではその関係性は引き継がず、各自の魂は個別の運動評価を受けて、その評価によって別の物性を与えられて別の局面に臨むのであり、個別で見ればその繰り返し、局面で見ればそうした展開、で世界は動く、という社会構造設定および機構認識らしい。で、そうした仏法に於いては、自己研鑽以外に精進の方法は無く、現世未練は現世での運動量としては有為だが来世では無意味、とのようにこの物語でも説明されてきた、かと思う。

御わざのことども(七日ごとの追善供養は)、はかばかしくのたまひおきつることどもなかりければ(殿が式次第を取り決めなさる事が無かったので)、大将の君なむ(大将君が)、とりもちて仕うまつりたまひける(万事手配してお仕え申しなされたのです)。「御わざのことども」は注に<七日ごとの法要。「ども」複数を表す接尾語。『完訳』は「四十九日とすれば十月初旬」と注す。>とある。

*今日やとのみ(この御忌中では殿は気落ちなさった余りに、もう是までかとはばかり)、わが身も心づかひせられたまふ折多かるを(御自分の健康さえ心配になるほどでいらっしやる時が多かったが)、はかなくて(何時の間にか忌明けとなり)、積もりにけるも(上を失った日が何日も経っ

てしまったのが)、夢の心地のみす(夢のように思えます)。 *「けふやとのみ」は、上の落命に気落ちした余りに殿がくもはやこれまでかとばかりに弱気になった、ということなのか。「わが身も心づかひせられたまふ」がく自分の身も心配になりなさるゝだろうから、訳文では此処の文意を大体そのように取ってあるらしく、他に是といった解釈も思い付かないので左様に従うが、驚くほど分かり難い言い回しだ。本当に何故こんな言い方をするのか不思議だ。何か、特にこの段では、語り手の息遣いに、私を感じ取れていない、当時の読者なら当然に分かる大前提みたいなものが込められているのかも知れない。が、残念ながら、今のところ分からない。

*中宮なども(明石中宮なども)、思し忘るる時の間なく(紫の上をお忘れなさる時無く)、恋ひきこえたまふ(恋い慕い申しなさいます)。 *「中宮」は注に<明石中宮。>とある。そうなのだろうとは思いますが、この話運びやら語り口調には、むしろ唐突感が強い。何か見落としている気がして落ち着かない。

(2012年11月17日、読了)